

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】西村 道也

【所属】(助成決定時)一橋大学大学院経済学研究科

【研究題目】空間情報科学とオープンソースソフトウェアによる前近代貨幣流通分析
—ビザンツ帝国の貨幣を事例に—

【研究の目的】

本研究の第一の目的は、前近代国家であるビザンツ帝国の貨幣を事例に、その流通分析を行うための広範なデータ収集である。ビザンツ帝国の貨幣史・経済史研究において、定量分析自体の是非に関して議論は紛糾しているが、本研究はそれを肯定する立場に可能性を見いだしている。定量分析を試みた先行研究は、近現代の国民経済モデルに基づく経済指標の探求に重点を置いている。だが、本研究は、先行研究が前近代に特有のデータの希少さに対応できていないと考える。

本研究は、国民経済モデルが扱うより小さな都市・集落レベルを対象として出土貨データを分析することを最終的な目的とする。その際には、空間情報科学の手法とオープンソースソフトウェアを利用する。

なお、本研究の題目は、前近代貨幣を強調し、研究助成者の専門であるビザンツ帝国の貨幣を副題としている。本研究が取り組むのが、前近代貨幣研究の共通問題(データの希少さに由来する定量分析の困難さ、ソフトウェアの導入・更新コスト)でもあり、特定の地域に留まらないと考えるためである。

【研究の内容・方法】

本研究では、まずビザンツ貨幣と空間情報科学に関する資料収集を行う。収集対象は、①ビザンツ貨幣に関する資料、②空間情報科学に関する資料、に分けられる。

①ビザンツ帝国の関連資料は、校訂された文字史料を中心に、従来から本邦でも収集が進んでいる。結果として、国内にも海外と比肩する資料を有する機関が複数ある。しかし、国内では、これまで貨幣・古銭学関連の資料は計画的な収集の対象とならなかった。収集対象となるのは、博物館の貨幣コレクションカタログ、帝国が存在したバルカン半島や小アジアなどで行われてきた各地の出土貨カタログなどである。

②空間情報科学は、特に 21 世紀に入って活況を呈している。ただし、分析手法は未だ発展途上にある。本研究において行う空間情報科学に関する文献収集は、めまぐるしい研究動向の変遷をフォローするためである。収集対象となるのは、主として 21 世紀以降に発表された空間情報科学関連の文献と、ビザンツ帝国に関する歴史地理情報を網羅的に収集するオーストリア科学アカデミーのプロジェクトの成果 *Tabula Imperii Byzantini* シリーズなどである。

本研究は、①で収集した種々のビザンツ貨幣に関する資料・データを、②で比較・検討した空間情報科学の手法や歴史地理情報を用いてオープンソースソフトウェアで分析するという方法をとる。

イギリスの古銭学者たちは、西欧初期中世に由来する出土貨を、埋蔵貨(英 *hoard*)と個別発見貨(英 *single find* 或いは *stray find*)に分けている。埋蔵貨は、貯蓄や宗教儀式などにより意図的に流通から失われたと考えられている。一方、個別発見貨は、遺失などにより偶然流通から失われたと考えられている。本研究では、この研究動向を参考にして、埋蔵貨と個別発見貨の区別を行う。

【結論・考察】

近年のビザンツ貨幣研究では、出土貨を、出土地名・造幣地名・金属・金種・数量・出土状況(埋蔵貨か個別発見貨か)などで整理する作業が進んでいる。1000 年に及ぶビザンツ期全てをカバーした研究成果はないが、8 世紀までの出土貨については、網羅的なカタログがいくつかある。その一例が、7~8 世紀のバルカン半島の出土貨についての F. Curta, "Byzantium in Dark-Age Greece (The Numismatic Evidence in its Balkan Context)", *Byzantine and Modern Greek Studies* 29-2 (2005), pp.113-146 である。

さしあたり、このカタログの入力作業と単純集計から特徴的な事実を 2 点示すことで、結論・考察に代えたい。まず、収録された 1,691 枚の出土貨の内訳からは、金貨と銀貨は埋蔵貨、銅貨に個別発見貨が多い傾向が分かる。次に、空間を考慮した集計からは、イタリア半島、シチリア島、北アフリカ、エジプトにある諸都市の造幣所製のビザンツ貨幣が、ドナウ川下流域まで少数であるが到達していることが分かる。だが、これらの含意や単純集計を超えた統計手法の検討は十分ではなく、本研究には課題が残されている。